

第4回研修会

「3月11日 その時、あなたは？」

記録者 飯久保博幸

・2011年11月26日(土) pm1:30~4:30 山梨県国際交流センター

・第1部 「パネル・ディスカッション」

—共に生きていくために、私達にできることは何か—

〈パネリスト〉

陳 秀綿さん(台湾)

シーラ・バーガンさん(アメリカ)

アレクシス・パチェコさん(チリ)

・第2部 「自由に話そう!交流タイム」

〈 第1部 〉

①司会者から

冒頭、3.11大震災をテーマにどのように災害と向き合っていけばよいのか、生の声を聞かせてほしい、お互いに意見を交換していきたいと会の趣旨が話された。

次に、パネラーの紹介が簡単にされた後、3.11の大地震の様子がふりかえられた。

②3人のパネラーから

自己紹介、現在の生活状況について話された。(内容は省略)

③「3.11の大地震の時、あなたはどこで何をしていましたか? 地震と知った時、どんな気持ちでしたか? またサポートしてくれる人がいましたか?」

〈アレクシスさん〉

アパートにいた。はじめ、隣の人が動いていると思った。電気を消して、ドアや窓を開けて、ドアの柱の所に立っていた。地震が止んで、安心したからソファの所に寝ころんだ。30.40分後、テレビのニュースを見た。

過去、チリにも大きな地震があった。チリでは津波にも気をつけている。阪神・淡路大震災の次の日には、津波がくるので、準備をした。チリは日本の真下、海の隣にある。

〈陳さん〉

アパートに3人でいた。揺れていたとき、めまいがした。ふらふらした。他の二人がどこにいるか、探した。二人は危ないので座っていた。地震の怖さを知った。

9年前の台湾地震の時は、私は日本にいた。家や家族に被害はなかったが、恐怖が残っている。今回の地震では、電話が使えなく家族に無事を知らせる連絡がすぐとれなかった。

〈シーラさん〉

英語を教えている中学校の職員室にいた。こわくて何が起きたかと思った。日本は地震が多いので、小さい地震かと思った。何人かが立っていて「地震?地震?」と言っていた。ひとりの先生が「座って」と言ったのでみんな座った。

思い出すと、大きな地震でこわくなった。終わりかなと思った。みんなも同じだと思った。生徒もこわかったと思う。外に逃げ出したかった。最後に先生に抱きかかえられて外に逃げた。先生も体験したことがないほどの地震だった。窓や自動車が揺れているのが見えた。こわい思いをしたが、私を気遣ってくれた。

④「地震に関する情報はどこで得ましたか?」

〈シーラさん〉

テレビを見て、震源地はどこか、政府の対応を教えてもらった。CNNのアメリカ放送は30分後、報道があった。情報をコンピューターで見ることができた。いとこがイギリスにいる。土曜日（地震の翌日）イギリスから日本に来る予定だった。金曜日（地震の日）、私は迎えに行くために成田までのバスのチケットを買いに行く予定だった。地震のこと、チケットのことなど聞くためにEメールをした。3回目を通じた。混んでいた。いとこや出身地のアイオワには、なかなか通じなかった。（アイオワとは15時間の時差がある）成田空港は閉鎖された。コンピューターの情報で被害が大きくなっていくのを実感した。長い一日だった。

〈陳さん〉

地震の大きさを知ったのはテレビ。東京にいる娘は会社に勤めている。地震当日の夜は、8時間かかって歩いて自宅へ帰ったそうだ。娘からもこちらからも心配で連絡したかったが、なかなか、つながらなかった。

〈アレクシスさん〉

普通の地震で、そんなにひどいとは思わなかった。妻にメールをした。1時間後返答がきた。テレビをつけた。ちょうど津波が来た時だった。

去年2月、チリでは、津波で一つの町が壊された。チリの地震では、寒くない夏で、朝の4時だったが、犠牲者が多かった。

⑤「避難場所を知っているか？ 助け合うことができるか？」

〈アレクシスさん〉

知っている。地震時、すぐに外に逃げない方がよい。感電や窓ガラスが落ちてきたり、爆発があるなど、外は危険がある。揺れるのが止まったら、外へ行く方がよい。

奥さんは働く場所にいたが、どこに避難していいかわからない。指示に従いたい、ことばがわからない。自分で行動できるように、地図や場所などの表示には、漢字が読めない人のために、ひらがな、かたかな、いろいろな言語でかいてほしい。

〈陳さん〉

自治会に入っているので、避難場所は知っている。そこに避難する訓練をしている。隣の人と助け合うことができている。

〈アレクシスさん〉

隣の人への助けは期待できる。一いい人だからできると思う。心配しなかったから今回は外に出なかった。ふだんの間人関係が大事。1、2か月挨拶すると日本人とは近くなる。挨拶することは大事。

〈シーラさん〉

その時、先生がそばにいたから、サポートしてくれた。一人でアパートにいたら、揺れがおさまるまで、部屋の中において、何かの下に隠れる。その後、外に出た方がいいと思う。赤十字の情報でこんなことをしなければと学んだ。

避難場所は知っている。日本の人はやさしい。地震の時も同じようにしてくれるだろう。

⑥「もし、何かあったときのことを考え、特別に準備していることがあるか？」

〈陳さん〉

水と食料の確保をしている。ご飯と水の応急食料を自治会の訓練で勉強した。台湾協会の会員同士で、連絡が必ずできるようにネットワークをしっかりとっている。自治会に入って地元の人とコンタクトをとっている。台湾の人は、日本の人と交流をしている。声をかけたりお互いに助け合うサポートをしている。

〈アレクシスさん〉

チリ人は、山梨では一人か二人、全国では1000人から1200人のネットワークがある。私は、10人の人と連絡がとれる。大使館でも連絡がとれる。自分の命は、自分で守る。部屋において、地震にあった時、生命三角の隙間に入ることをすすめる。サンフランシスコ地震の時、生きていた人は、三角の隙間のところから、みつかった。

〈シーラさん〉

地震の後、水、乾燥食品、缶詰、薬、懐中電灯、ろうそく、お金（日本円、アメリカドル）パスポートを持っている。家族や友人と連絡できるコンタクト、リストを用意してい

る。避難場所には近いので自分で行ける。お互いに助け合うことが大切だ。

〈陳さん〉
過去、台湾の水害の時、食料品の確保がいわれた。備えている。
大使館から、大丈夫かと連絡があった。

〈シーラさん〉
大使館からは何も連絡がこなかった。Eメールで大丈夫だと皆に伝えた。自分から、アメリカ大使館、イギリス大使館、オーストラリア大使館の情報をチェックした。

⑦「一人一人に政府はサポートしきれない面がある。自分の命は自分で守る必要が

ある。日本の地域に住む人、市役所に望むことは何ですか？何がほしいか？」

〈アレクシスさん〉
地図、看板にひらがなやカタカナの標示をしてほしい。インフォメーション全部に翻訳がほしい。家にいても、働く場所にもどこでも情報があるとよい。

〈陳さん〉
台湾人は、災害時、心が落ち着かないので、抱擁してお互いに心がつながるようにしている。大丈夫と声をかける、背中を軽くたたくなど一つの愛で抱擁する。
自治会で連絡表をつくる。回覧板でいろいろな情報が入る。自治会のまわりの人に声をかけ合い、教え合う。ネットワークをつくる。

〈シーラさん〉
地図は、かたかなとひらがなで書いたものが必要である。日本人はパニックにおちいることなく、うまく乗り切っていることに感動している。

⑧司会者から

パネラーの発言をまとめ、参加者にも災害に備えるための意見を求めた（3人が発言）。

A：情報を得るのには、ラジオがよい。3つの時期（①24時間内で自分の命を守る ②3日ぐらいまで、公的支援でどう対応 ③3日以降、支援がある。長期的な政府支援）に自分のシナリオを考えていく必要がある。火事の時の避難の対応（関東大震災の例）など、どういう時にどういうふうになるか、地域によっても対応に違いがあるなどシナリオを点検する必要もある。災害時だけでなく、ふだんに地域社会で暮らしている、そのコミュニティを支えていることが大切である。確実な情報を得るためには、情報源を複数持ったほうがよい。賢い情報の選択をしたい。

B：3. 1 1福島での体験者から地震の生々しい体験を話していただいた。体験から、自分の中に冷静なものを持つ（状況判断力を持つ）ことが大切だと力説された。

C：日本国内の近くの人より外国の家族の人にかけてほうが連絡できた（外国からかけてもらって連絡できた一おたがいの連絡）例を話していただいた。

⑨司会者から

災害時の対応、状況判断、コミュニティの確立、情報を選択する力を磨くことなどまとめられた。

〈 第2部 〉 交流タイム

短時間のため、グループにわかれずに、24名が自己紹介（地震のことも含む）をした。地震のことをまとめた。

○ふだんから、食料は2、3日分確保したい。風呂の水は捨てない。ガソリンは半分になったら、いつも満タンにしておく。手動の充電器を用意。津波被害があったので、地震名に「津波」を入れたらどうか。

○外国人同士のネットワークをつくること（例：インドのお誕生会）

○日本人と外国人の日頃のネットワークをつくること

○日本人と外国人がお互いに知っておくべきことを学習する機会をもつこと

○電気がない生活がなつかしかった。ろうそく1本で家族がいっしょに一うれしかった